

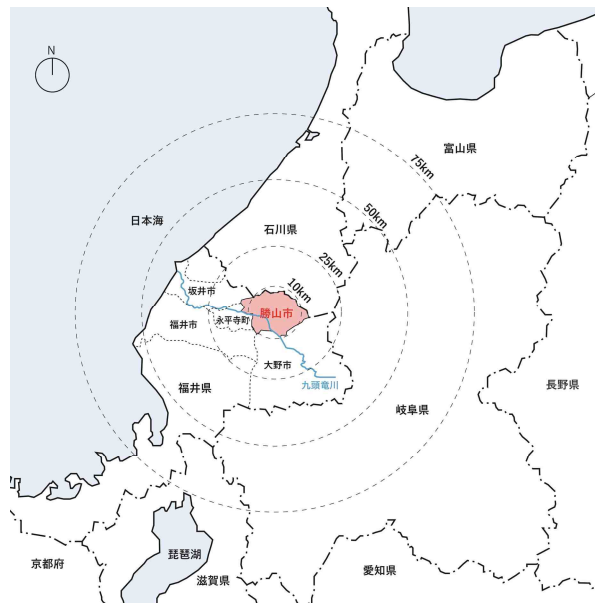
第1章 勝山市の概要

1. 自然的・地理的環境

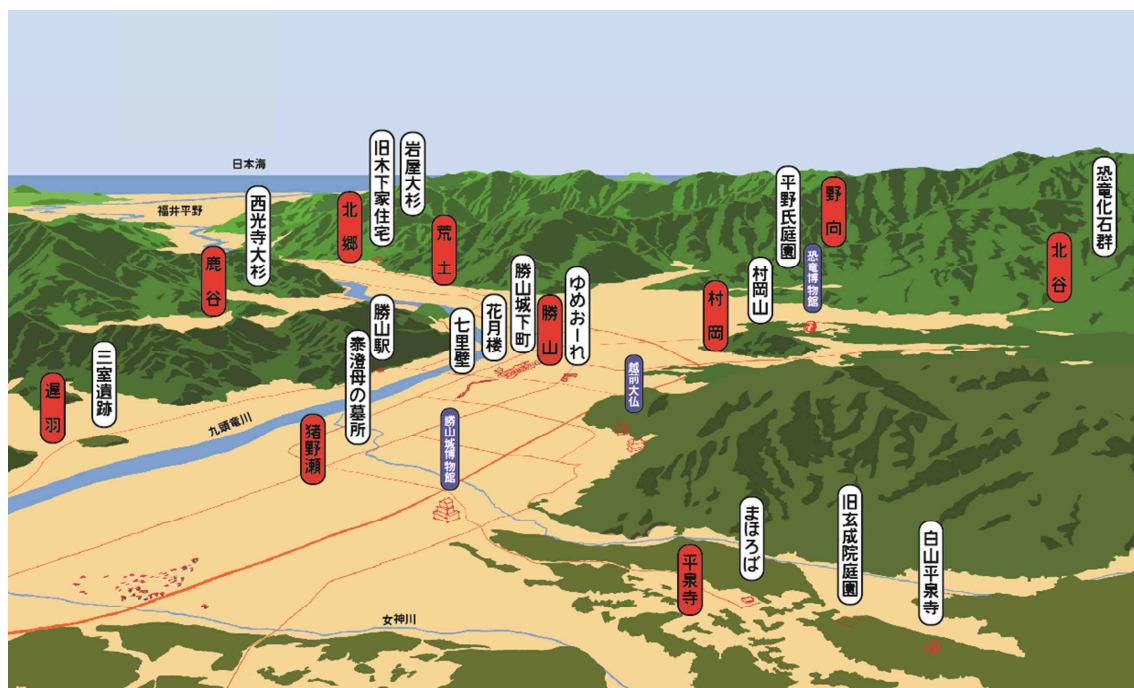
(1) 位置・面積

勝山市は、福井県の東北部に位置し、市の中心は福井市の東方約28kmの地点にあります。東南は大野市、西南は福井市、北西は坂井市、吉田郡永平寺町、北は石川県に隣接しています。面積は253.88km²で、東西22.3km、南北17.0kmです。

市の周辺は1,000m級の山々に囲まれ、中心部は県下最大の河川である九頭竜川の中流域に位置しています。



勝山市の位置図



勝山市の全体鳥瞰イメージ

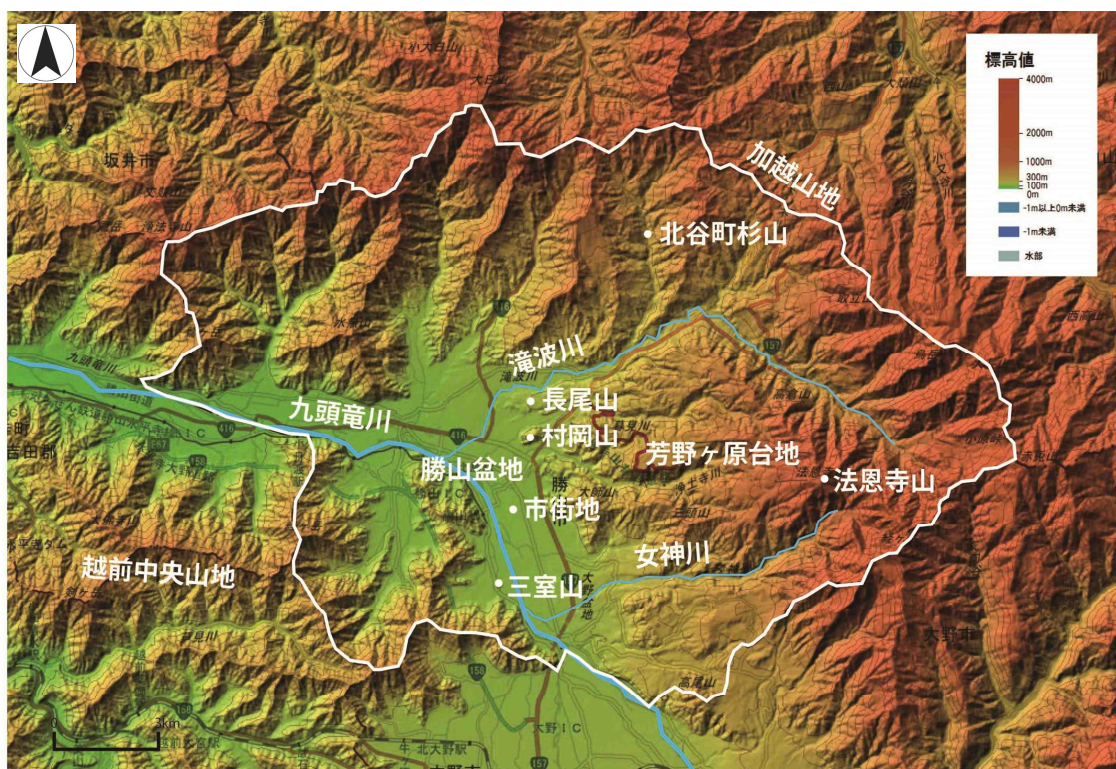
(2) 地形・地質

勝山市の地形は、標高1,000mを超える北部の加越山地と標高700m以下の南部の越前中央山地、これらの山々に囲まれた勝山盆地により構成されています。勝山盆地は、九頭竜川の氾濫原や河岸段丘、滝波川や女神川等の扇状地や河岸段丘があり、盆地内には三室山や村岡山等、島状の小丘もみられます。市街地は九頭竜川が形成した河岸

段丘に沿って広がっています。地質は九頭竜川両岸から河岸段丘にかけては沖積層、その他の扇状地はおおむね洪積層となっています。

昭和 63 年(1988)に北谷町杉山にある手取層群で、1 億 2 千万年前の肉食恐竜の化石等が発見されました。その後も調査が続けられ、全国でも貴重な恐竜化石の宝庫となっています。

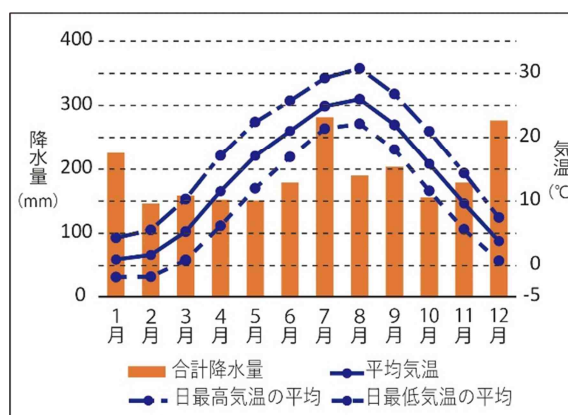
法恩寺山の溶岩流により形成された芳野ヶ原台地は、ガラス質安山岩が露出しています。ガラス質安山岩は加工しやすく、非常に鋭利になるため、旧石器時代から縄文時代にかけて刃物として利用されました。長尾山遺跡では、ガラス質安山岩の加工場が見つかっています。なお、加越山地は、一部が白山国立公園や奥越高原県立自然公園に指定されています。



勝山市の地形(国土地理院電子国土 Web より)

(3) 気候

勝山市は、典型的な内陸性気候で、一年を通して湿潤で寒暖の差が激しいという特徴があります。夏は蒸し暑く冬は寒い、福井県内屈指の豪雪地帯で、特別豪雪地帯に指定されています。近年は、地球温暖化等の影響を受けて積雪量は減少傾向にありますが、克雪は勝山市における重要な課題の一つとなっています。



気温・降水量(2000-2020、観測地点：勝山、気象庁より)

(4) 植生・生態系

勝山市の東部の山地(経ヶ岳や大長山周辺)には、日本海型のブナ林であるチシマザサ-ブナ群落^{チシマザサ}が分布している。低山帯にはアカマツ林やブナ、コナラなどの二次林があるものの、特に市の東部では、スギやヒノキなどの植林が進んでいます。

希少植物としては、北谷町のミチノクフクジュソウ、取立山のミズバショウ^{ミズバショウ}、池ヶ原湿原の湿原植物群(ミズチドリなど)などがあげられます。また、スギの大木が並ぶ平泉寺白山神社の菩提林は、旧参道の石畳道とともに特徴的な景観を形成しています。

市街地ではホタル、田園地帯ではアキアカネ等の他地域では少なくなった昆虫がみられます。深山には大変貴重なイヌワシ、クマタカ等の猛禽類^{猛禽類}も生息しています。九頭竜川ではコチドリやキジ等の鳥がさえずり、アユやアラレガコ、ウグイ等の魚が生息し、ヨシやネコヤナギ等の植物が繁茂しています。

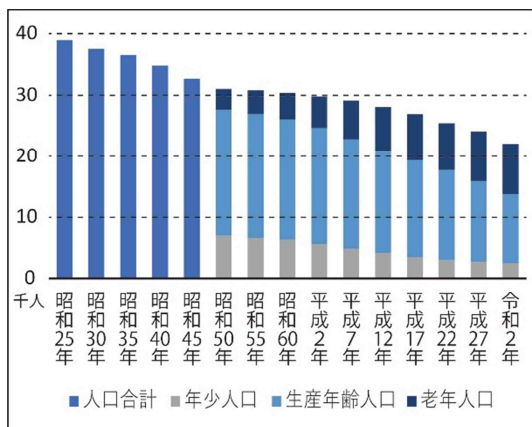
2. 社会的状況

(1) 人口動態

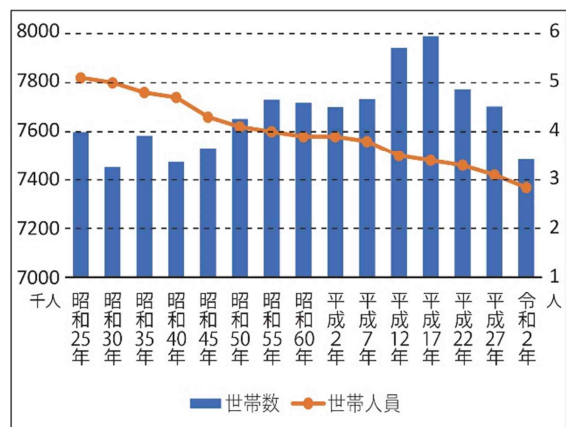
①人口・世帯数

勝山市の人口は、令和2年(2020)の国勢調査で22,150人となっています。昭和25年(1950)には38,962人(現市域の人口)でしたが、昭和29年(1954)の勝山市誕生以降、減少し続けており、福井県内でも著しい減少率となっています。年齢3区分別の割合を見ると、平成2年以降、老年人口が年少人口を上回り、少子高齢化が進んでいます。平成27年には年少人口11.4%、老年人口34.0%となっており、福井県全体(年少人口13.3%、老年人口28.6%)と比較しても少子高齢化が急速に進行しています。

世帯数は、平成17年(2005)が最大(7,990世帯)でその後は減少しています。一世帯当たりの人員は、昭和25年(1950)には5.1人でしたが、平成27年(2015)には3.1人となっています。



勝山市の人口推移(国勢調査)



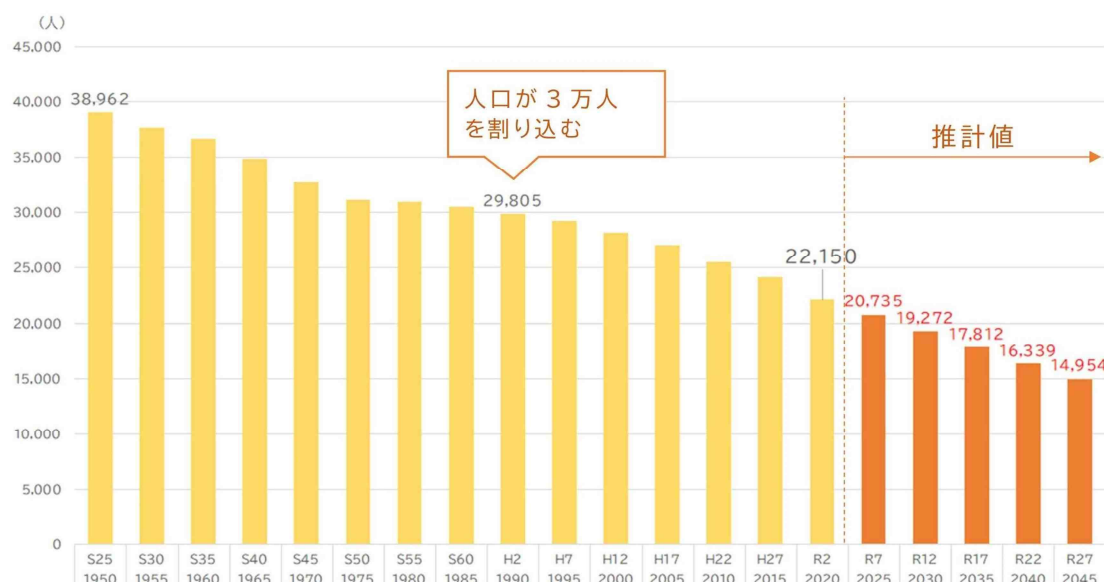
勝山市の世帯数・世帯あたり人員推移(国勢調査)

②将来人口の推計

勝山市の人口推計によると、令和12年(2030)には昭和25年(1950)のピーク時の約半分となる19,272人となっています。その後も年間300人前後の減少が見込まれ、令和27年(2045)には14,954人に減少すると推計されています。「勝山市人口ビジョン」

(令和3年度改訂)では、人口減少の要因は、転出超過による社会減と出生率の低下に起因する自然減であるとしています。従って、人口減少問題に取り組むためには、転出者を抑制して転入者を増やすことと、特に若い世代を増やすとともに出生率を上げ、出生数を増加させることの2つを同時に進め、人口構成そのものを変えて、勝山市の持続可能なまちづくりを推進することが必要であるとしています。そのためには、以下の基本的な考え方にもとづきまちづくりを推進していくことを示しています。

人口減少問題に取り組むための基本的考え方
 (「勝山市人口ビジョン」(令和3年度改訂)より)
 (1)安全安心な生活環境の充実
 (2)地域コミュニティの活性化
 (3)多彩な交流によるにぎわいの創出

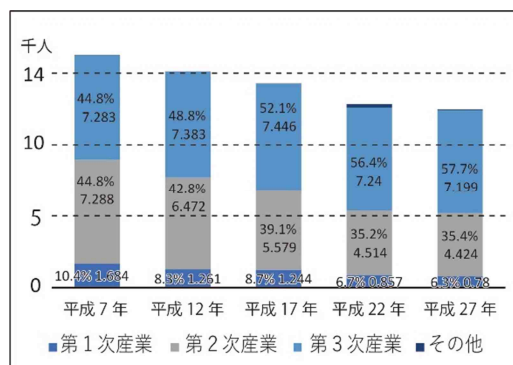


勝山市の人口推移と長期的な見通し(「勝山市人口ビジョン」(令和3年度改訂)より)

(2)産業

勝山市の産業は、明治以来の地場産業である繊維産業を中心とする商工業や古くから盛んな農林業を基幹としてきました。

全国的に繊維産業の構造が変化したことや農林業の担い手不足等もあり、第3次産業就業者の割合が増え、平成17年(2005)以降は5割を超えています。特に、観光産業への従事者が多くなっています。



産業別人口の推移(国勢調査より)

(3)観光

勝山市の観光資源は、豊かな自然や歴史、伝統です。年間入館者数100万人を超える県立恐竜博物館、発掘調査と史跡整備の進む白山平泉寺旧境内があり、勝山城下町の景観が残るまちなかでは勝山左義長まつりも続けられています。また、繊維産業の

歴史を伝えるはたや記念館ゆめおーれ勝山をはじめとする施設が整備されてきました。地域の魅力を多方面から磨き、伝えながら、質の高い観光客の誘致を図っています。

観光客数は、新型コロナウイルスの感染拡大のため、令和2年(2020)度には大幅に減ったものの、平成23年(2011)に1,545,000人であったのが、令和元年(2019)には2,216,000人となっており、約1.4倍になっています。

令和6年(2024)には北陸新幹線の延伸、令和8年(2026)には中部縦貫自動車道の全線開通が予定され、さらに公募設置管理制度(Park-PFI)により、かつやま恐竜の森(長尾山総合公園)の再整備・管理運営を行う計画なども進められており、今後も観光客の増加が見込まれます。

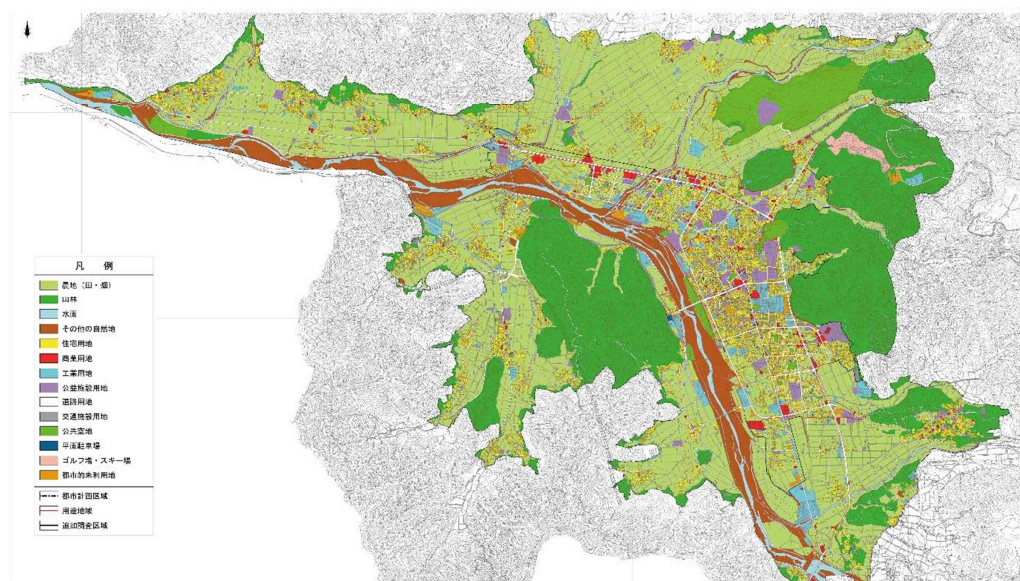
観光客数の推移(福井県観光客入込数、単位：千人) (「福井県観光客入込数(推計)」より)

	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1
恐竜博物館・かつやま恐竜の森※	542	553	733	761	1,053	1,107	1,023	1,128	1,259
スキージャム勝山	284	287	305	314	279	250	272	317	291
平泉寺白山神社	159	155	126	93	111	123	360	228	216
越前大仏・勝山城博物館	142	148	126	120	160	171	156	113	125
ゆめおーれ勝山	110	112	120	115	115	104	87	76	82
勝山左義長まつり	120	120	100	130	110	100	110	80	120
勝山市の入込状況(延べ人数)	1,545	1,568	1,702	1,736	2,020	1,995	2,176	2,106	2,216

(4) 土地利用

市域を貫く九頭竜川沿いに市街地が形成されています。中心部は住宅等が集積しており、その周りは集落のまとまりが点在し、さらに周辺には農地が広がっています。

商業用地は国道等の道路に沿って立地し、比較的規模の大きな工業用地は市内に分散しています。



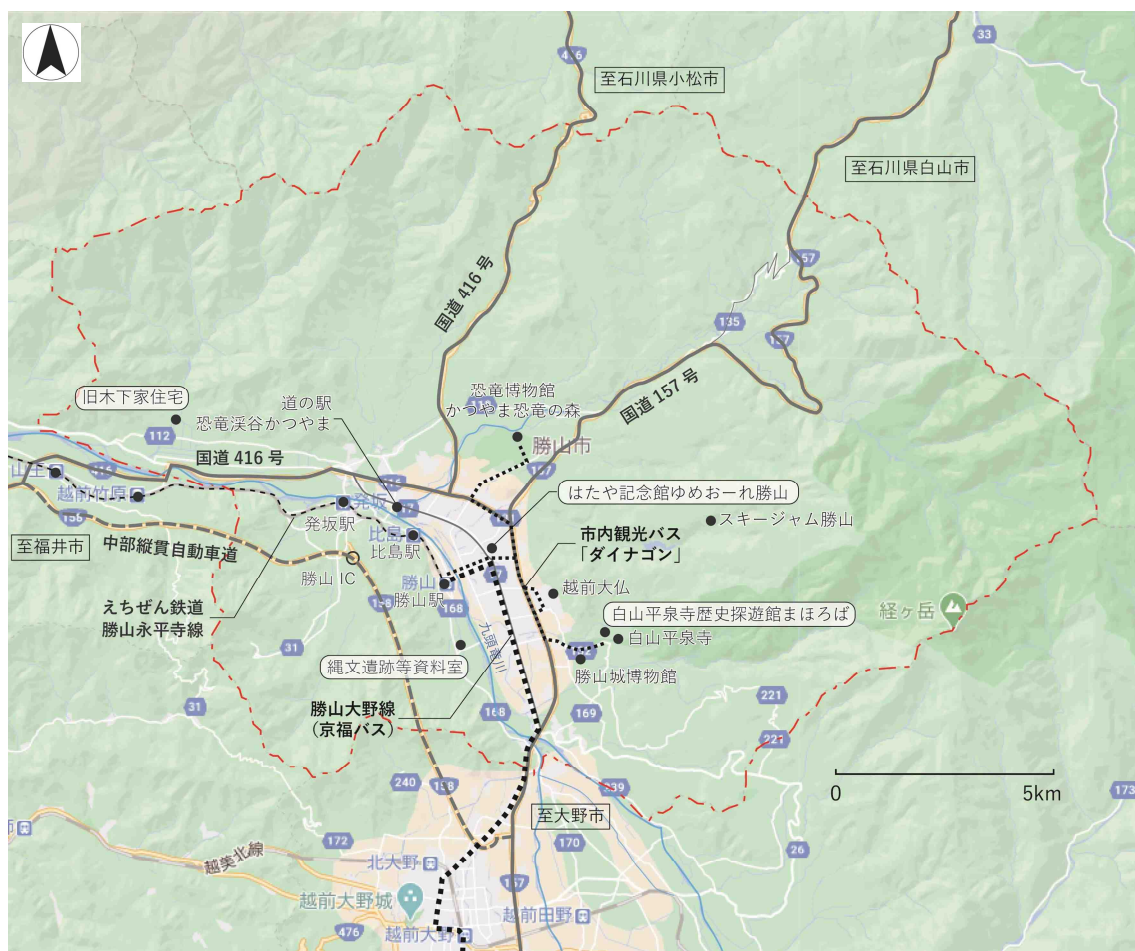
土地利用現況図(市資料より)

(5) 交通

幹線道路は、国道 416 号が福井市方面から、国道 157 号が大野市方面から、ともに勝山市域を貫き、加越山地を越えて石川県へとつながっています。また、福井市から岐阜県を経由して長野県に至る中部縦貫自動車道が市内を通り、鹿谷町には勝山 IC が設置されています。同 IC から国道へ通じる道路の途中に道の駅「恐竜溪谷かつやま」が令和 2 年(2020)に開業しました。

公共交通機関は、九頭竜川の左岸を通り、福井市と勝山市を結ぶ「えちぜん鉄道勝山永平寺線」、勝山市と大野市を結ぶ広域路線バス「勝山大野線」があります。また、観光バス「ダイナゴン」が市内の観光施設を周遊して運行しています(土日祝のみ運行、冬期間運休)。

令和6年(2024)には、北陸新幹線が延伸し、金沢・敦賀間が開業する予定となっており、関東方面から勝山市へのアクセス向上が期待されます。また、令和8年(2026)には中部縦貫自動車道の全線開通も予定され、中京・関東方面から勝山市へのアクセス向上も期待されます。



勝山市の交通条件

3. 歴史的背景

(1) 勝山市の歴史

① 大地形成と恐竜の時代

勝山で見つかる恐竜化石が眠る地層(手取層群)がつくられた中生代白亜紀前期(1億2,000万年前)という時代には、日本列島はアジア大陸の一部でした。その後、約2,000万年前に大陸の東縁部が裂けて、大陸との間に海が入り込み、日本列島が形成されました。このころ、恐竜はすでに地層の中で化石となった状態でした。地層として運ばれてきた恐竜化石が勝山で発見されたのは、昭和57年(1982)のことです。北谷町杉山でワニ類の化石が発見されたことをきっかけとして、現在までに6種類の新種を含む恐竜化石(化石鳥類を含む)が見つかっています。北谷地区では手取層群が露出し、恐竜化石以外にも動物・植物等の化石が発見されており、恐竜時代の生態系が明らかになりつつあります。

② 先史～川と山の恵み～

猪野口南幅遺跡から出土した石器は、15,000年ほど前の旧石器時代後期のもので、この時期には九頭竜川の形成した河岸段丘上で人びとが暮らしていたことがわかります。市内では同じような地形が他にもあることから、今後も発見が期待されます。

縄文時代の勝山市域は、福井県内でも屈指の繁栄を誇った地域です。市内には、縄文時代の草創期から晩期までの遺跡があり、その多くは九頭竜川やその支流が形成した河岸段丘上に立地しています。

平泉寺町の赤尾池遺跡からは草創期の槍先形尖頭器が発見されました。村岡町の長尾山遺跡では多量のガラス質安山岩の石片が出土しており、法恩寺山で産出する石材を使った石器加工場と考えられます。遅羽町の三室遺跡からは、中期の竪穴住居や後期の配石遺構が発掘され、県内を代表する縄文遺跡として県史跡に指定されています。北郷町の上野遺跡、鹿谷町の本郷遺跡、猪野瀬地区の大島田遺跡等は、晩期の代表的な遺跡です。これらの遺跡から出土した土器は、北陸地方のみならず中部高地、太平洋側の瀬戸内、関西、東海地方との交流を推測させます。

弥生～古墳時代の集落は、水田に適した低湿地に接する自然堤防や山裾に位置する場合があります。しかし、勝山市域ではこのような場所が少ないことから、ムラの形成も少なく、その結果、遺跡数は減少すると考えられています。そのような中でも、鹿谷町の本郷北遺跡などでは弥生時代の竪穴住居が見つかり、平泉寺町のおおわたり大渡城山古墳は4世紀後半につくられた方墳であることがわかりました。近年、鹿谷町の志田神田遺跡、荒土町の松ヶ崎杉原遺跡、勝山地区の袋田遺跡・三谷遺跡で弥生～古墳時代の遺物や住居跡が見つかり、注目されます。

③ 古代～毛屋郷の開発と平泉寺のはじまり～

奈良時代から平安時代の勝山市域は大野郡毛屋郷と呼ばれていました。勝山地区の三谷遺跡からは「毛屋」の文字が書かれた須恵器が出土し、袋田遺跡・榎新田遺跡などからもこの時期の土器が出土しています。また、猪野瀬地区の北市遺跡では多数の竪穴住居や掘立柱建物が見つかり、毛屋郷の中心であったと考えられています。なお、「毛屋」の地名は猪野毛屋や下毛屋等の地名に引き継がれています。この時期の遺跡は、河

岸段丘上に位置し、洪水の心配が少ない安定した地形に広がっています。古代には段丘上の開発が進んだことで農業生産力が向上し、人口が増えました。

遅羽町の三室山は、その円錐形の山容から神が宿る神奈備山とされ、麓の巨石群は神が降り立つ磐座と考えられています。また、山中の貴重な水源には信仰の場が形成されました。その代表が養老元年(717)に白山を開いた泰澄が祈っていると白山神が現れたと伝わる「平清水(平泉・現在の御手洗池)」で、平安時代にはこの池の周りに修行僧などの活動する場ができていきました。これがやがて平泉寺へと発展していきます。

④中世～平泉寺の発展と「勝ち山」～

白山信仰の拠点である平泉寺は、平安時代に比叡山延暦寺の末寺となり発展してきました。最盛期の室町時代には、48 社、36 堂、6 千坊、僧兵 8 千、寺領 9 万貫・9 万石とうたわれた繁栄を誇りました。しかし、天正 2 年(1574)に一向一揆との戦いに敗れ全山焼亡します。天正 11 年(1583)、越前美濃国境から帰還した顕海によって境内の一部が再興されました。平泉寺町をはじめとして市内には泰澄あるいは平泉寺とゆかりのある場所や伝承が残されています。また、この時期の遺跡も、古代に引き続いて河岸段丘上に位置していることが多く、猪野瀬地区の猪野口南幅遺跡や猪野毛屋遺跡、荒土町の松ヶ崎杉原遺跡では掘立柱建物跡が見つかっています。猪野毛屋遺跡からは漆器椀・皿などが出土しており、村の暮らしの一端がうかがえます。

また、山中には山城が築かれました。勝山地区の三谷城など平泉寺と関連のある山城や野向町の野津又城、鹿谷町の保田(西光寺)城、荒土町の壇ヶ城など、越前一向一揆と関わりのある山城があります。その中でも、平泉寺との戦いで一向一揆が城を築き立て籠もったのが村岡山です。村岡山は一向一揆が平泉寺に勝ったことにちなんで「勝ち山」と呼ばれ、「勝山」の地名の起こりとなったと伝わっています。その後、一向一揆は柴田勝家によって平定され、勝山地域は、勝家の甥で柴田義宣の養子となった勝安が支配を任されました。

⑤近世～勝山城下町と周辺の村～

柴田勝安は、村岡山から袋田村(現在の勝山地区)に本拠を移し、河岸段丘の上に城を築きました。また、このとき村岡山麓の郡村から河岸段丘の下に移り住んだ人びとは郡町を形成し、袋田町、後町とともに勝山城下町の礎となりました。

柴田氏の後、領主の交代が続きますが、江戸時代初めの寛永元年(1624)には松平氏勝山藩が成立します。その後、幕府領となり、さらに元禄 4 年(1691)には小笠原貞信が入部して小笠原氏勝山藩が成立し、幕末まで継続します。また、この時期の市域は、勝山藩だけでなく、郡上藩、鯖江藩や福井藩領、幕府領が設置され、複雑な支配体制となっていました。

勝山藩の小笠原氏は廃城となっていた勝山城を再建しました。河岸段丘の上には城郭のほかに武家屋敷も整備され、段丘下の袋田町・郡町・後町の三町がいつそう城下町として整えられました。近年は、勝山城跡・袋田遺跡(勝山城下町遺跡)の発掘調査も行われ、城郭の構造や町人の暮らしぶりがよみがえりつつあります。

城下町の行事としてはじまった勝山左義長は、除災招福、五穀豊穰の祈願祭であると同時に、鎮火祭としての意味もあります。最も古い事例は、寛延元年(1748)に郡町の左義長「はやし所」として記録されているものです。

周辺の村においては、北郷町の旧木下家住宅をはじめとして多くの歴史的な建造物

が残されています。野向町の比良野家は勝山藩の大庄屋で、同家の離れ座敷には藩主が訪れました。また、勝山市域のほとんどの地区には浄土真宗の信仰の場である道場があり、人びとが集まって講を営む風習がありました。村の道場は信仰の場であるとともに、交流の場として村の寄り合い所を兼ねるところも多く、人びとの生活は道場を中心に営まれていました。

この時期には鉾山の開発も進みました。17世紀の『越前地理指南』には、小原、細野口、堀名中清水、檜曾谷(新町)の銀山と坂東島の鉛山、平泉寺の金山の跡が記されています。堀名銀山は、安政年間に幕府により本格的な採掘が行われ、多量の銀を産出しました。また、堀名や細野口には石灰山があり、農業用の石灰が生産されました。

⑥近現代～たばこ・繊維産業の隆盛から勝山市の誕生と地域づくり～

勝山市域の近代的工業は、製糸業と刻たばこ業が出発点です。しかし、製糸業は明治29年(1896)の勝山大火で工場が焼失し大きな打撃を受けました。また、刻たばこ業は明治37年(1904)の煙草専売法により、たばこ製造が国の専売となりました。そのため、これらの業者が織物業へと転じていったのです。そして、第一次世界大戦に伴う好景気により、絹織物羽二重の輸出は増加し、勝山の織物業は栄えていきました。その後、時代の変化に対応して、人絹織物、合繊織物へと転換し、現在に至っています。

昭和29年(1954)に1町8か村が合併し、勝山市が誕生しました。平成14年(2002)には勝山市エコミュージアム推進計画が作成され、明治以来の1町9か村に対応した10地区それぞれの歴史文化を大切にしまちづくりが進められています。平成21年(2009)には市内全域が日本ジオパークの認定を受けました。また、民間により建設・運営されている勝山城博物館や越前大仏は、観光拠点としての活用が期待されています。

(2)災害の歴史

勝山市はこれまでさまざまな災害を受けています。江戸時代以降、記録上確認できる勝山市域における主な災害は次ページの表のとおりです。

江戸時代以前は、気候不順などを原因とした不作や飢饉が起き、疫病も発生して特に人的な被害が起きました。

水害は、九頭竜川などが氾濫を繰り返しており、流域では大きな被害をもたらす存在でした。享保11年(1726)には女神川の氾濫で猪野口村が大きな被害を受けました。また、昭和40年(1965)の三大風水害で山崩れの発生や九頭竜川をはじめとした河川の堤防が決壊し、大きな被害がありました。近年は豪雨による災害が発生しています。

火災は、城下町で発生しています。火消しの訓練も兼ねた「勢揃い」と呼ばれる早駆けが、現在の「走りやんこ」(市指定)のはじまりです。明治29年(1896)の勝山大火では、中心部において全戸の80%が焼失するという大きな被害を受けており、現在の中心部の町並みを形成する町家や寺社の多くは大火後に建てられました。

勝山市は特別豪雪地帯に指定されていますが、雪害としては、昭和38年(1963)の「三八豪雪」、昭和56年(1981)の「五六豪雪」、平成17～18年(2005～2006)にかけての「平成18年豪雪」などで甚大な被害がありました。平成30年(2018)2月には積雪200cm、令和3年(2021)1月には3日間で積雪195cmを記録(最高積雪深225cm)し、人的被害や生活路線の狭小化、住宅の軒折れ、農家のビニールハウス倒壊など多数の被害を受けました。令和3年の時には、平泉寺白山神社境内で倒木等が発生し、屋根雪下ろしなど指定文化財建造物等の維持・管理に大きな負担となっています。

現在、勝山市では、災害に備えることを目的に、洪水・土砂災害、地震に対するハザードマップも作成されています。

また、近年はクマの文化財指定地内やその付近への出没による観光客や調査者、研究者への被害の懸念や、イノシシによる史跡指定地の掘り起こし等が増加しています。さらに、ニホンカモシカ(国指定)が住宅街にエサを求めることが増加しており、特別天然記念物の保存等に課題が生じています。

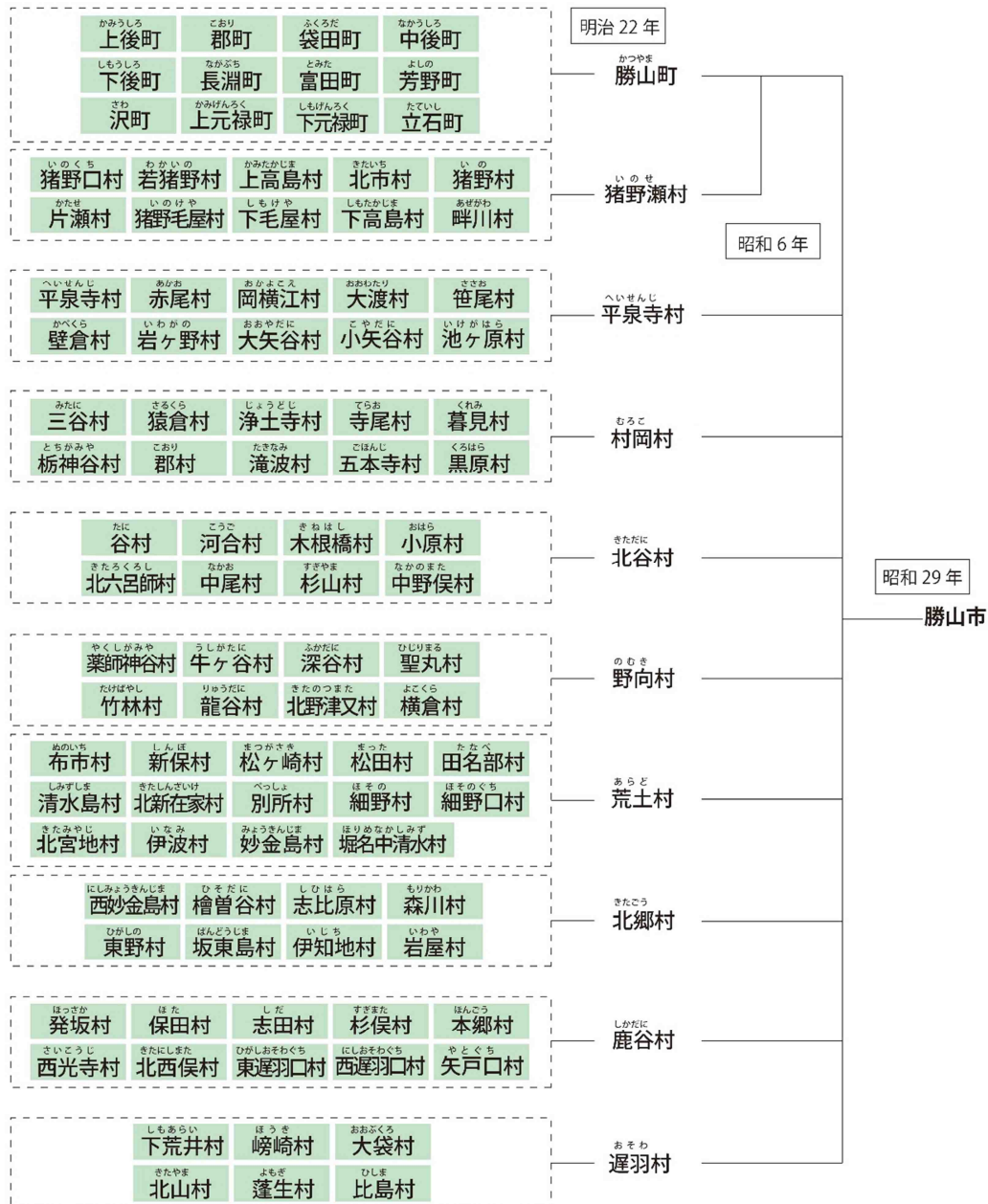
勝山市における主な災害の歴史 *三八豪雪・五六豪雪・平成18年豪雪は全国的な豪雪で気象庁が命名。

西暦	和暦	災害等
1628	寛永 5	九頭竜川洪水
1634	寛永 11	大水で野向・荒土の村道被害を受ける
1675	延宝 3	記録に残る最初の勝山町大火、このとき古い町記録等焼失
1701	元禄 14	洪水、長湊町・福井道などが被害
1707	宝永 4	洪水、勝山寺川橋落ちる
1721	享保 6	九頭竜川洪水で用水大破
1726	享保 11	土砂洪水、女神川上流十月平崩落し平泉寺村・猪野口村・下荒井村等大被害。流失家屋37軒、死者99人
1746	延享 3	郡町から出火し袋田町・後町へ延焼、家中・社寺等計458軒焼失
1749	寛延 2	後町大火。水吞家34軒・百姓4軒焼失、牢屋も焼く
1781	天明 1	後町から出火、家中・町家・寺院等計568軒焼失
1783	天明 3	冷夏・冷害、東日本中心に飢饉、勝山でも餓死者多数出る、翌年も長雨で不作
1784	天明 4	疫病はやり、平泉寺では村の入口すべてに御札6本立てる
1789	寛政 1	洪水、女神川・滝波川・野津又川・皿川・岩屋川等流域で被害
1791	寛政 3	風雨、勝山領内だけで本百姓・水吞計38軒潰れ、10軒半潰れ
1795	寛政 7	大水、翌年5月にも洪水(翌年に奥山騒動へ発展)
1799	寛政 11	寺町から出火し他町へも延焼、町家299軒・11か寺焼失
1804	文化 1	寺町民家から出火し、町家29軒・2か寺焼失
1807	文化 4	翌年まで悪作で困窮のため平泉寺村中の者が難渋
1812	文化 9	大雪、翌年1月までに積雪3.6メートル
1813	文化 10	大雪、積雪4メートル。勝山町の左義長は23日から25日に延期。牛ヶ谷村雪崩
1814	文化 11	龍谷村で神社および民家35軒・土蔵13棟焼失
1815	文化 12	地震。100年以來の大地震と伝えるが、家屋倒壊等はなし
1821	文政 4	立石町から出火し、47軒焼失
1822	文政 5	御殿から出火し、門・土蔵・塀を除き城内焼失
1825	文政 8	洪水。町・村とも田畑大被害、下荒井村流失し入会山へ移住
1827	文政 10	本郷村27～28軒焼失(道場を含む)
1834	天保 5	矢戸口村39軒焼失
1836	天保 7	冷害・干害。大凶作となり天保飢饉起こる
1841	天保 12	後町から出火し、同町7軒・長湊町81軒・滝波村85軒等焼失
1846	弘化 3	大風雨で家潰れる。特に滝波村16軒潰れ、その内2軒焼ける
1858	安政 5	2月25日午前1時頃より前代未聞の大地震。傾き、損じ等は数多い
1859	安政 6	町方疫病流行、大砲で打ち払う。コレラによる死者、三町で50人以上
1860	万延 1	洪水・不熟。九頭竜川筋氾濫、城下53軒被害、田畑も被害甚大
1869	明治 2	河合、一村全焼。冷害・不熟、越前一带凶作
1896	明治 29	勝山大火、立石より出火、町家1,200余軒・寺18か寺焼失(勝山町全戸数の80%)
1927	昭和 2	大雪、2月9日野向村横倉・牛ヶ谷で表層雪崩発生(死者8人)
1933	昭和 8	成器女子高・町役場焼失、翌日尊光寺も焼失
1959	昭和 34	伊勢湾台風(建物流失22棟・半壊11棟、被害413億8千万円)
1961	昭和 36	第2室戸台風(建物全壊3棟・半壊11棟、被害2億3千万円)
1963	昭和 38	三八豪雪(建物全壊42棟・半壊9棟・破損6千棟、被害総額10億5千万円、死者16名)
1965	昭和 40	40.9三大風水害(建物全壊25棟・流失21棟・半壊41棟・破損112棟、被害総額18億7千万円)
1977	昭和 52	五二豪雪(建物全壊4棟、破損1棟、被害総額8億6千万)
1981	昭和 56	五六豪雪(建物全壊42棟・半壊16棟・破損291棟、被害総額61億1千万円)
2004	平成 16	福井豪雨
2005	平成 17	平成18年豪雪(建物全壊7棟・半壊4棟・破損328棟、被害総額8億6千万円)
2011	平成 23	平成23年豪雪(建物破損25棟・非住宅被害1棟)
2018	平成 30	福井豪雪(建物被害174棟・非住宅10棟)
2021	令和 3	豪雪
2022	令和 4	8月4日に豪雨。市内各地に被害(河川氾濫、建物被害63棟等)。

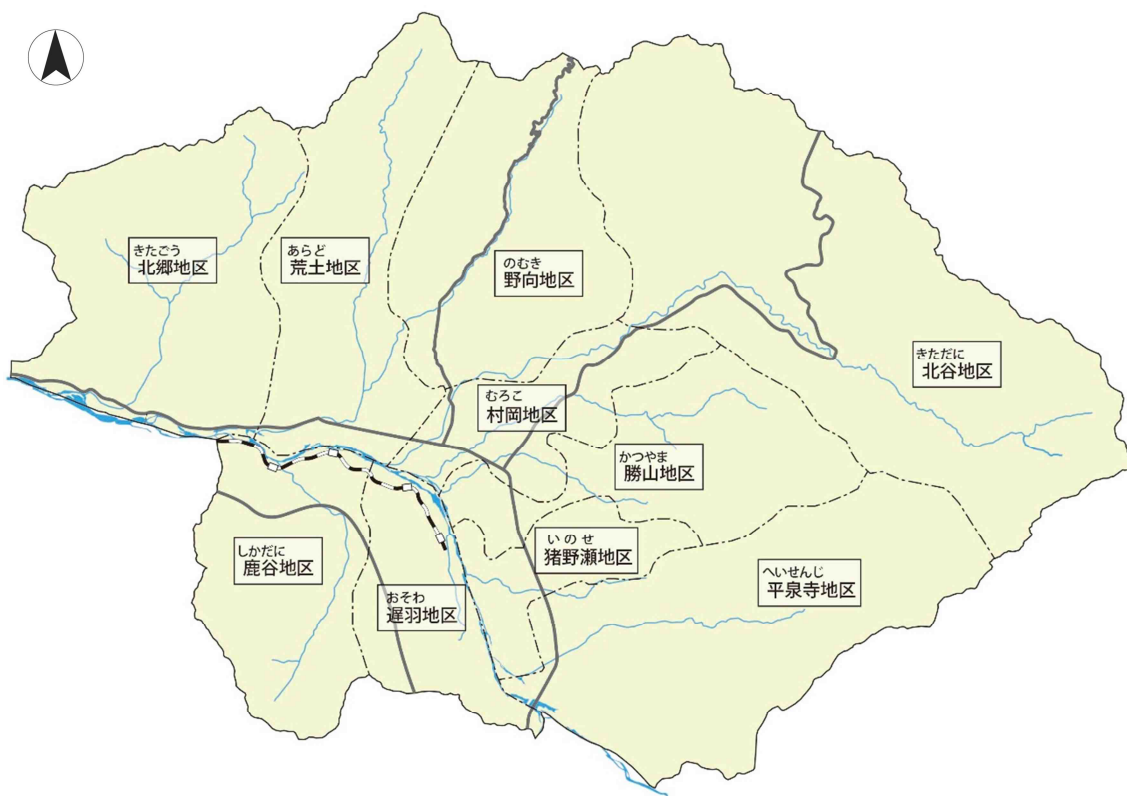
4. 勝山市の成立と各地区の特徴

(1) 勝山市の成立

明治 21 年(1888)の町村制により、翌 22 年、袋田町・後町・郡町など城下町時代の町からなる勝山町と、農業等を中心に成立した自治組織(現在の区に相当)が地区ごとに統合された 9 か村が成立しました。その後、昭和 6 年(1931)には猪野瀬村が勝山町と合併され、さらに昭和 29 年(1954)には 1 町 8 か村が合併され勝山市が誕生しました。



勝山市を構成する旧町と旧村



現在の勝山市を構成する 10 地区

(2) 各地区の特徴

勝山市は、前ページと上図に見るように、明治 22 年(1889)に誕生した旧町村の区割りを基にする 10 地区を単位としてさまざまな活動が行われています。また、この区割りは、勝山地区が九頭竜川の河岸段丘上に形成された市街地を中心とし、それ以外の地区が九頭竜川支流の河岸段丘上に集落が形成されて背後の山々と一体となっているなど、地形的な特徴があります。特に北谷地区は山間部にある地区で、山村集落を形成しています。

以上のように、勝山市は地形や歴史・文化のつながりが深い 10 の地区ごとにまちづくり団体が結成され、それぞれで個性的な活動を行ってきました。ここでは、地区ごとに自然・歴史・文化などの特徴を見ていきたいと思います。

①勝山地区(河岸段丘の地形を活かした城下町の町並み、近世の町人文化から発展した祭り・年中行事、繊維など近代産業の発展、近代建築と文化の集積)

勝山地区は、九頭竜川に沿って形成された河岸段丘上にあります。段丘崖や高低差をつなぐ坂によって特徴的な市街地景観をつくり出しています。

勝山は柴田勝安の「勝山城(袋田城)」築城によって城下町が形成されはじめ、その後領主交代が続き、元禄 4 年(1691)に入部した小笠原氏の時代に城下町ができあがりました。城下町は、「七里壁」と呼ばれる段丘崖を巧みに取り込み町並みが形成されました。上位の段丘面には城郭と「家中」と呼ばれた武家屋敷が設けられ、下位の段丘面には寺社や町家があり山家口坂、お種(万市)坂、石坂、大手坂、神明坂、小姥母坂の 6

つの坂が上位の段丘面と下位の段丘面をつないでいました。このような城下町の町並み景観は、令和元年(2019)には日本遺産に認定されています。

江戸時代には、勝山城下町内外の往来も活発になり、町人文化が形成され、勝山左義長や年の市等、現在まで続く祭りや年中行事も生まれました。

近代に入ると、繊維産業が発達し、勝山市の基幹産業となりました。現在も当時の機業場が残っています。市内外から人が集まり、まちなかは賑わい、さまざまな文化が持ち込まれ、交流を通して文化が形成・集積されました。

この地区では、明治29年(1896)に大火があり、勝山町全域の約80%の建物が焼失しましたが、大火以降に建設された歴史的建造物が現在も面的に広がっています。また、機業場であった建物が「はたや記念館ゆめおーれ勝山」に生まれ変わり、博物館として活用されているなど、歴史を感じることでできる町並みが現在も残っています。

②猪野瀬地区(白山・平泉寺とのつながりと自然地形(大師山)、郡上藩の代官所、歴史をつくる現代建築(勝山城博物館・越前大仏)、地形と農業(勝山水菜・メロン))

猪野瀬地区には、古代には北市遺跡に代表されるように、大きな集落が出現しました。また、白山信仰を開いた泰澄の母(伊野姫)の出生地と伝えられ、平泉寺との深い関連があったことが推測されます。大師山の山頂近くにある太子堂には、泰澄大師像が祀られており、山頂からは白山を仰ぎ見ることができます。

近世以降は、若猪野に郡上藩の陣屋(代官所)が設けられ、郡上踊りを通じて岐阜県郡上市八幡町とも交流がありました。

民間により建設された大師山西麓の越前大仏や勝山城博物館の現代建築は、今後の活用が見込まれる新しい拠点となっています。

また、河岸段丘の地形・環境を活かした農業が地区の特徴となっています。現在は勝山水菜や若猪野メロン等、勝山市を代表する特産品を生産し、野菜や花の収穫体験を通して地域住民の交流が積極的に行われています。

③平泉寺地区(白山禅定道、国史跡白山平泉寺と日本遺産、大工技術と建造物(寺社・民家))

平泉寺地区には、苔・杉木立・菩提林・弁ヶ滝などの特徴的な自然や、中世の石造物が密集する平泉寺墓地、平泉寺と白山をつなぐ白山禅定道、大矢谷白山神社、平泉寺金山跡などの文化財が多数あります。その中でも、国史跡に指定されている白山平泉寺旧境内は、平泉寺白山神社を核とする南北約1km、東西約2kmの面積約200haに及び、平泉寺地区の歴史文化の中心です。中世には48社、36堂、6千坊が存在し、全国屈指の「中世宗教都市」として繁栄しました。現在、史跡内では発掘調査や史跡整備が進められ、その歴史が少しずつ明らかになっています。「中世宗教都市」平泉寺をつくり出した石畳道や石垣など、石を使った技術は一乗谷へ伝わり、朝倉氏による城下町形成に活かされたと考えられています。史跡のガイダンス施設である白山平泉寺歴史探遊館まほろばは、来訪者の拠点として最新の情報を発信しています。なお、令和元年(2019)には日本遺産に認定されました。

また、平泉寺区には、平泉寺を建築した大工技術との関係性を推測できる伝統的な様式の大型農家が数多く残ります。なだらかな斜面地に集落が形成されていることから、集落内の道に沿って石垣を築いています。周辺の山並みを背景として田園風景が連続しており、自然環境と人びとの営みが一体となった集落景観が形成されています。

平泉寺区は、地域住民により平泉寺白山神社境内を中心とした歴史的環境が守られています。

④村岡地区(縄文時代からはじまる自然と共生する暮らし、一向一揆の拠点・勝山のはじまり、恐竜の発信(恐竜博物館))

村岡地区は、九頭竜川支流に沿った山裾に集落が形成されています。滝波川、浄土寺川、暮見川くれみの自然豊かな水辺環境と長尾山、村岡山など里山環境に恵まれています。滝波付近には、縄文遺跡が多く分布しており、昔から人びとが住む地域であったことがわかります。

戦国時代には、村岡山が一向一揆の拠点となり、山城が築かれて、平泉寺との決戦の場となりました。一向一揆が平泉寺に勝ったことにより、この山は「勝ち山」と呼ばれ、「勝山」の地名の由来となっています。村岡山は、地区の象徴として住民により大切にされており、地域で登山道の整備を行うとともに、毎年8月には「ちょうちん登山」を行っています。

また、長尾山には、県立恐竜博物館及び長尾山総合公園が整備され、福井の恐竜化石を発信する拠点となっており、全国から多くの見学者が訪れています。

⑤北谷地区(日本最大の恐竜化石発掘地、加賀牛首との往来拠点として発展した農山村、越前白山麓の豪雪地帯の暮らし)

北谷地区は広大な面積を有しますが、そのほとんどが山地で、勝山市で一番の多雪地帯でもあり、豊かな自然環境に恵まれています。木根橋にあるミチノクフクジュソウ自生地では、白山麓はくさんろくの自然環境の保護・整備等に取り組む小原E C Oプロジェクトが中心となり、村岡小学校と保全活動を毎年行っています。また、日本最大の恐竜化石を産出する1億2,000万年前の地層「手取層群北谷層」が露出しており、多数の化石が発掘されてきました。現在、化石発掘現場は野外恐竜博物館として見学することができます。

北谷地区は、石川県白山市白峰へ通じる道沿いに発展した地区です。この地域には古くより牛首(石川県白山市白峰)から出作りで定着した人たちも多く、白峰にある浄土真宗寺院の門徒も多くいます。

また、北谷地区は、地区の古い歴史を物語る家並み、白山麓の豪雪地帯に特徴的な大壁造の民家、谷のお面さん祭り、はやし込みに代表される民俗行事、食文化、民具など、勝山と加賀との往来拠点として発展した農山村文化が色濃く残っています。中世には、河合こうご、六呂師、中尾、木根橋、小原、谷、中野俣、杉山、そして横倉(野向地区)をあわせて「七山家」と呼ばれていました。中世に平泉寺との戦いにおいて主力となったのはこの七山家であり、その後に柴田義宣・勝安と戦った谷城跡などの遺跡もあります。

北谷町コミュニティセンターにある山の駅「よろっさ」は、地元住民によるNPO法人きただに村が指定管理者として管理・運営し、鯖なすの熟れ鯖し等地元特産品を生産・販売しています。また、北谷の歴史や自然環境を活かした教育を行っているかつやま子どもの村小学校・中学校により、旧北谷郵便局が道具博物館として活用されています。